学びを通じて人々の愉快な人生を演出する

月刊 ＶＩＣ 通信 【2026年5月】

編集前記

皆さんこんにちは！
5月になると初夏の気配を感じる瑞々しいフルーツが旬を迎えますね。
「メロン」の出荷が本格的になる時期で、特に「アンデスメロン」や「クインシーメロン」などが食べ頃を迎えます。
「さくらんぼ」も5月上旬からハウス栽培のものが出回り始め、中旬以降は露地ものも登場します。
そんなフルーツの季節ですが、5月は「びわ」の最盛期でもあります。
今月は皮が薄くて傷つきやすく繊細で、美味しい時期が短い「びわ」について紹介したいと思います。
「びわ」という名前は、実がふっくらと丸みを帯び、ヘタに向かって細くなっていく独特の曲線が、弦楽器の琵琶の胴体にそっくりだったため、名付けられたと言われています。当初は漢字でも楽器と同じ「琵琶」という言葉が当てられたようですが、そのままでは楽器なのか植物なのか区別がつきにくいため、植物であることを示すために冠の「王（たま）」を「木」の偏に変えて、「枇杷」という表記が生まれたようです。
実は、枇と杷のそれぞれにも、「びわ」の特徴を表す意味が隠されています。枇は「比べる、並べる」という意味で実が寄り添う姿を指し、杷は「手でつかむ」という意味があり、手で握りやすい「柄のついた形」をしていることに由来しています。
「びわ」は冬の寒さを耐え抜き、春の光を浴びて5月～6月に黄金色の実を結び、優しい甘みを生み出します。
そして、「びわ」は、葉も万病を癒やす力があると考えられており、乾燥させた葉をお茶にするなど、健康維持のために活用されています。
この「びわ」の原産地は中国の南西部（湖北省や四川省あたり）ですが、地中海沿岸のイタリアやスペイン、トルコの他、イスラエルやブラジルなど、世界中の温暖な地域で栽培され、日本でも冬が比較的暖かい西日本の沿岸部や離島で栽培されています。
日本の「びわ」は、長崎などの西日本で主流の小ぶりで凝縮された甘みと瑞々しさが特徴の茂木系と、千葉などの東日本で主流の大ぶりで甘みの中に酸味が混ざった、爽やかな味わいの田中系が代表的です。
どちらも冷やしすぎると甘みを感じにくくなるので、ほんのり冷えた状態で食べると最も香りと甘みを贅沢に感じられます。

ＶＩＣ通信も旬で美味しい情報をお届けします。

株式会社バリューイノベーション　代表取締役社長　鈴木正志

クイズ「お言葉ですが」

「けりをつける」の語源

「物事に決着をつける」「終わらせる」の意味で使う、「けりをつける」という言葉ですが、この「けり」が何に由来しているかご存知でしょうか。

この言葉の由来は、古語の助動詞「けり」であると言われています。和歌や俳句の文末が「～けり」で終わることが多かったため、そこから「終わり」「結末」という名詞的な意味が生まれたそうです。それが転じて、「けりをつける」＝結末をつける、決着させるという意味で明治期から使われているそうです。

また、似たような言葉に「けじめをつける」「片をつける」などの言葉もありますが、
この違いもあわせてご紹介をいたします。



けりをつける　＝ 決着をつける
けじめをつける ＝ 線引き・節度を明確にする
片をつける　＝ 処理する・始末する

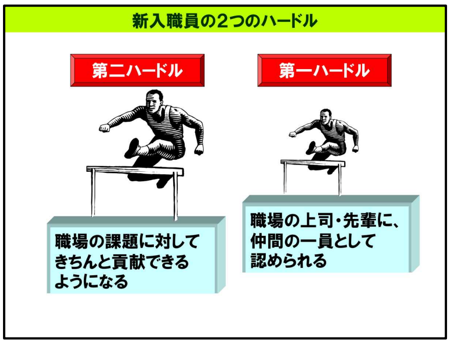
言葉の由来や違いを知ることは、伝え方を見直すきっかけにもなります。
日々のやり取りの中でも、意味を意識しながら適切な言葉を選んでいきたいですね。（大越）

けんげんいじょう（研修の現場からのいい情報）

新入職員向け「ビジネスマナー研修」を実施しました！

今月は、独立行政法人で実施した「ビジネスマナー研修」をご紹介いたします。
本研修では、「社会人に必要な知識と態度を理解し、学生から社会人への意識転換を図るとともに明日から社会人として行動できるようになる」ことを目的とし、2日間かけて社会人としての心構えやマナー、コミュニケーション、文書作成の基本を実施しました。同期意識を醸成するために新卒者と社会人経験者（既卒者）が合同で受講しました。

冒頭で、2日間で学ぶことはその場限りにするのではなく、職場で実践してほしいと講師からお伝えしました。
ビジネスマナーのセッションでは、基本的な形式を学ぶ前に、「ビジネスマナーはなぜ必要なのか」をグループで考えました。ただ単にお辞儀の角度や敬語、電話応対を覚えるのではなく、マナーが大切な理由を自ら考えることで、意欲的にマナーを身に付けようとしていました。ここでは、講師から仕事をするうえで大切なことは、上司・先輩に仲間の一員として認めてもらうことであり、そのためにもマナーが必要であることを、新入職員の第一ハードルとしてお伝えしました。
次に、社会人の基本ルールや仕事の仕方を実施しました。研修開始時は、社会人として行動できるか不安を抱えている様子も見られましたが、会社生活をイメージできるケーススタディやロールプレイングを通じて前向きな言動に変化していました。
今回の受講者は、メンバー相互に疑問点などを質問しており、過去の社会人経験やアルバイトの経験からアドバイスを行っていました。最後に、「こんな社会人になりたい」という目標と今後の行動を具体化し、全員の前で堂々と宣言していました。
組織の将来を担う新人の皆さまの今後のご活躍を心より願っております。（秋山）



研修の特徴

■「わかる」→「なぜ」を知る
→なぜ必要か、を自分で考え納得感を高める

■「できる」→「現実感」を持つ
→ケースで学び、会社生活をイメージする

■「やる」→「体験」をする
→ロールプレイでやってみて、頭と身体で覚える

Newへぇ～S

生成AIの普及でデータ処理量が急増していることを背景に、高性能半導体の需要が世界的に増しています。
こうした特需が消費財メーカーにも広がり、私たちの身近な商品の技術が思わぬ分野で応用されているそうです。
今月はこうした動きを取り上げた記事をご紹介します。

～～

AI半導体特需、消費財企業にも　花王、台湾で洗浄剤量産　味の素は副産物から絶縁材

花王は4月、台湾現地法人の研究所内に海外初の「洗浄センター」を本格稼働した。（中略）
新規稼働する施設は日本の拠点と同規模で、半導体向け洗浄剤の生産規模を引き上げる。台湾積体電路製造（TSMC）など半導体産業が集積する台湾に拠点を置き、顧客ニーズに即応する。洗浄工程の設計まで一体で提案する。
TSMCが回路線幅が2ナノ（ナノは10億分の1）メートルの量産を始めるなど、半導体では微細化が進む。製造工程ごとに微粒子などが生じる半導体は、全工程の3～4割を洗浄が占める。異物がわずかでも残れば回路不良を招きかねないからだ。
花王は培った衣類や肌、髪の表面を傷つけずに汚れを落とす技術が強みだ。自動車やテレビ用の電子部品向け洗浄剤に応用してきた。半導体向けでは分子レベルの汚れを洗い落とす「ナノ界面制御技術」を使う。
花王のケミカル事業は2025年12月期のセグメント別売上高が前の期比7%増の4515億円と、全体の24%を占める。半導体用洗浄剤に限れば4割増えた。

抜粋：日経新聞朝刊(4/30)第12版7面 「AI半導体特需、消費財企業にも　花王、台湾で洗浄剤量産　味の素は副産物から絶縁材」

～～

記事の中では、消費財の知見を半導体分野に応用している企業として、うま味調味料の製造過程で生じた副産物を活用し、フィルム状絶縁材料を開発した味の素、クレパスなどの色材技術を、半導体基板製造で使うプラズマ発生装置の不具合検知に活かす、サクラクレパス、小麦の粉砕技術を応用して独自開発した機器により、半導体向け電子材料の受託加工を行う日清製粉が紹介されていました。
いずれの企業も身近な存在ですが、家庭向けの商品の技術が最先端の半導体分野で、これほど活用されているとは知りませんでした。あらためて、本業で培った技術を異分野に応用することで、環境変化に適応しているのだと思いました。（夘沢）

今月の読書



『組織の違和感 ――結局、リーダーは何を変えればいいのか？』

著者：勅使川原真衣

発行：2026年1月13日初版

著者の勅使川原真衣氏は、組織開発コンサルタントとして、個人の能力でなく「関係性」という切り口から、組織をより良くする提案を行っています。

勅使川原氏は、組織を「1台の車」にたとえて、車がアクセルやブレーキ、エンジン、タイヤなどの機能が揃って初めて走るように、組織も「みんなが同じである必要はなく、誰がどの機能を持っていて、どう組み合わせてやっていくか」が重要だと考えています。

著者によると、存在価値を発揮する組織とは、個人の凸凹、「持ち味」の違いがかみ合っている組織に他ならないと言い、それを実現するために、個人の「違和感」に着目することが、組織を良い方向へ変えていく突破口になると述べています。

職場の違和感とは、それぞれの「解釈」のクセの違いが現われたもので、すれ違いは自分の解釈による「決めつけ」から生まれると言います。

確かにそうだな、と思ったのは、次の部分です。

> 「決めつけ」の奥底には、それぞれの「当たり前」「ちゃんと」「普通」があります。このことを私は、次のように表現しています。
> 「人はみな違う色のメガネをかけている」（中略）
> メガネの色は意図して選べるものではなく、自然とついてしまうものでもあります。遺伝的な要素や脳の特性、生まれ育った環境に、これまで繰り返し吹き込まれてきた言葉など、さまざまな背景がメガネを色づけます。万人が持つ個体差によって、見ている景色が変わる。それは言わば「解釈のクセの違い」や「生き方のクセの違い」なのです。
> にもかかわらず、私たちはつい、自分と違う色のメガネをかけている人を否定したり、非難したりしがちです。（中略）自分の「当たり前」で相手を決めつけてしまうのです。
> どうしたら、色のついていない真実にたどりつくことができるのか。
> その手がかりになるのが、「違和感」です。違和感をキャッチした瞬間というのはまさに、相手とのメガネの違いが顕在化した瞬間だからです。（中略）
> そこでキーワードとなるのが、「当たり前」「ちゃんと」「普通」という言葉です。たとえば、企業の方からよく受けるこんな陳情。
> 「○○さんがこれをやるのは、『当たり前』だと思いませんか？」
> 「私は『ちゃんと』やってるのに、他の人がやってないのが許せない」
> 「なんでこれくらいのことが、『普通』にできないのか」（中略）
> これらの言葉が出てくる場面こそ、違和感が発動しやすいポイントです。なぜなら、本来は強調する必要がないのにあえて使っている言葉たちだから。（中略）
> そもそも、職場ではみな、**自分の尺度で**「ちゃんと」「しっかり」仕事に取り組んでいるはずなのです。（中略）
> もし「ちゃんとやっていない人」がいる、と思えて仕方がなかったら。
> ぜひ何はともあれ、いったんは**「自分のメガネからみると」**という注釈付きでとらえたいところです。（P.50-54）

どれも、無意識に口にしてしまいがちな言葉だと思いました。自分にとっての「当たり前」だからこそ、自分の想像しやすい解釈で、相手をジャッジしてしまいます。

著者は、どちらかが「正解」という前提では、職場のすれ違いはなくならない。「違和感」を持ったとき、「誰が正しいのか？」と考えるのではなく、「それぞれの人が何を『正しい』と思って行動しているのだろう？」と現状を認識しなおすことが、職場改善の出発点であると言います。そして、「決めつけ」を無くし、お互いの違いを「持ち味」としてとらえ、組み合わせを調整していくこと。目的に合った環境の整備をすることこそが、リーダーの役割であり、リーダーが変えるべきなのは、相手ではなく、決めつけてしまう自分こそだと述べています。

「違和感」というと、ネガティブなイメージを持ってしまうのですが、それは、そこに自分の解釈でジャッジが入った状態だからなのかと思いました。ジャッジをする前の、「何か変だな」と思った事実を、素直に感じたまま「気づき」として口に出す。お互いに出し合った事実から、解釈をまとめていく。そこから、どうするか？

「決めつけない」で相手に「違和感」を伝えることが、「私の問題」から「私たちの問題」を提起することにつながり、個人の「違和感」が職場の「課題」へ変わる瞬間と言っているのが、印象的でした。

（卯沢）

食べてmeal？ 飲んでみ～る？

日本酒で漬けた「梅酒」

普段、あまりお酒を飲まないのですが、今年に入ってから、梅酒にはまっています。
今までももちろん梅酒は飲んだことはあったのですが、甘いお酒があまり好きではなかったので、飲むといってもごくたまにという程度でした。それが今年に入って、旅行中に京都のちょっと良い食事処で何気なく頼んだ梅酒が本当に美味しくて、旅行から帰って、同じ梅酒が欲しいと近所の酒屋を探し回ったのですが見つかりませんでした。
そこで、仕方なく近隣の酒屋にあった、少し良い梅酒を買ったのですが、その梅酒も大変美味しく、それ以来、色々な梅酒を買っては飲んでみています。
今回は、私が最近飲んでとてもおいしいと思った梅酒をご紹介します。



鳳凰美田　熟成秘蔵梅酒

有名な日本酒の鳳凰美田で漬け込んだ梅酒です。濾過や添加物は一切行わないというのが特徴で、梅の果肉や澱（おり）で少し濁っています。濃厚な梅の香りと、あっさりとした甘み、さわやかな酸味があります。私が京都で飲んだのはこちらの梅酒です。



梅乃宿　あらごし梅酒

梅乃宿は奈良の酒蔵で、梅酒以外にも、日本酒で仕込んだ多種多様なあらごし果実酒がそろっています。漬け込んだ梅の実をペーストにして混ぜ合わせた贅沢な果肉感がある梅酒です。とろりとした口当たりと、濃厚豊潤な梅の香りが楽しめます。

梅の実は、これからが旬なので、今年は自宅で梅酒を仕込んでみようと思っております。

（金子）

～まとめ～

皆様、ゴールデンウィークは、どのようにお過ごしでしたか？
私は、吉祥寺の公共劇場（吉祥寺シアター）主催の、吉祥寺ファミリーシアターに出演していました！（私は学生時代から演劇に関する仕事にも携わっています）。吉祥寺ファミリーシアターとは、劇場が主催する、親子で劇・音楽・ダンスなどの芸術を楽しめる企画ですが、今年は、私がプロデュースしている劇団がこの企画の依頼を受け、小学生向けの劇を上演することになりました。
今回上演した作品の内容としては、「小学生になって人形遊びをやめた子供が、両親と一緒に人形供養に行ったところ、その夜、自分が人形と入れ替わってしまう夢を見て、供養されて燃やされる人形たちの声を聞くことになり、最終的には、ものを大事にすることの大切さに気付く」というものでした。
こどもに向けた作品を創作するのは初めてのことで、「こんな内容で、子供はちゃんと理解できるのかな？楽しんでくれるのかな？」と不安もありましたが、上演後、子供たちのアンケートを読んでみると、お話の伏線や演出効果もしっかりと理解してくれたようでした。また、親御さんたちのアンケートでは、「自分の子供がこんなに静かに劇を見ることができるなんてびっくりした。」「お話の内容を思った以上に理解していて、感心した」という感想が多く、大人が考えるより、子供は理解力があるし、感受性も豊かだということを痛感しました。
私も子供たちのように、年齢を重ねても向上心を持って成長していこうと、元気をもらえました。

（金子）